

〈論 文〉

アイヌ語千歳方言の「第三類の動詞」の構造と機能

佐藤 知己

- 目次
1. はじめに
 2. 「第三類の動詞」に関する従来記述
 2. 1. 金田一京助
 2. 2. 知里真志保
 2. 3. 田村すず子
 2. 4. 中川裕
 2. 5. 従来記述のまとめと問題点
 3. 千歳方言における「第三類の動詞」の特徴
 3. 1. 音声的特徴
 3. 1. 1. 声門閉鎖音の有無
 3. 1. 2. アクセント
 3. 2. 構成素となる名詞の特徴
 3. 3. 人称変化
 3. 4. 派生形
 4. 意味的、統語的特徴
 5. 「第三類の動詞」の特徴のまとめとアイヌ語語形成論における意義
 6. 終わりに

キーワード：アイヌ語千歳方言、第三類の動詞、名詞所属形の目的語抱合

1. はじめに

アイヌ語の動詞的形式の中に、他の多くの動詞と比べて、特に人称変化の点で特異な型を示す一群の形式の存在することは、早くから知られていた。それらは初期の研究者達によって「第三類の動詞」と名付けられ（金田一 1936、知里 1936）、その後の研究の中でもしばしば注目されて来た（田村 1988、中川 1995）。とはいえ、これまでの研究では、どちらかと言えば人称変化（屈

折)の仕方に関わる部分的な指摘がなされるにとどまり、例えば派生、合成(抱合)といった他の形態的側面と関連して、この動詞的形式がアイヌ語の語形成法全体の中でどのような意義を有するのか、といった理論的な考察はあまり研究者の注意を引いてこなかったとすることができる。本稿は、このいわゆる「第三類の動詞」⁽¹⁾の性格を音声、形態、統語、意味の各面から総合的に考察し直し、この形式の研究にこれまでとは別な角度から取り組もうとするものである。

(以下で資料として用いた言語データは、特に断らない限り、すべて千歳方言の話者であられた故白沢ナベ氏からご教示いただいたものである。ここにお名前を記し、感謝の意を表す。)

2. 「第三類の動詞」に関する従来の記述

2. 1. 金田一京助

金田一(1931)は、特にこのタイプの動詞的形式⁽²⁾について、この時点ではまだ詳しく記述してはいないようであるが、テキスト中には例えば以下のような例が見いだされ、注が付けられている(金田一 op. cit. : 439)。

parócheoiki⁽³⁾ おん身の口を
aechiekárkar 養ひ

「(3) paro (口)、chieoiki-ekarkar (を手にほにかける、を面倒をみてやる)、chi…ekarkar は、……をする義。e-oiki の e はそれについて(こゝは口を指す)、oiki は ushi (つける)と結んで oiki-ushi ともいふ、いぢる意、手をかけ世話する意味。paro があれば、甘いものをたべさしてやる意となり、chikarkarpe (着物) という語を受ければ、こしらへて着せてやる意、すべて手づからわが手を下ろして世話する意。」

もっとも、上記の説明を見る限り、この時点では語義の説明に重点が置かれており、この構造の文法的な説明はほとんどなされていないと言って良いように思われる。

これに対し、金田一(1936 [1993] : 127)は、「第三類」という表現を用いて、問題の動詞的形式について次のように述べる。

然るに、ここに、複合動詞でいて、意味の他動詞的なものがある、第三類ともいふべきものが存するのである。この事は、私と独立に、知里真志保君が気が附いて、幌別・登別地方のアイ

(1) その後、後述するように「連動詞」(中川 1995 : 7)、「連他動詞」(田村 1996 : 付録8)のような新しい呼称も提唱されているが、本稿ではアイヌ語学において伝統的に使われてきた「第三類の動詞」という表現を主として用いることにする。

(2) 「動詞」ではなく、「動詞的形式」としたのは、後述するように、一語か一語でないか、必ずしも自明とは言えない点があるからである。

ヌ語の中から、その数多の例を拾い出して、整然と書き上げて私に示したことがある。

複合動詞で、他動の意味を持つ動詞というのは、例えば kesampa (「後を追う」「追いかける」)、paroiki (「養う」) の類である。kesampa は kes (「末」「後」「裾」) と ampa (「手に執る」「持つ」) ani の目的複数形) とから成る語であり、paroiki は par (「口」) と、o (「そこ」) 及び iki (「物す」) から成る語である。それが「我、汝を追う」・「汝、我を追う」・「我、彼を追う」・「彼、我を追う」等の関係で、次のように活用されるのである。但し複数も同形で差支えなき場合は「等」を括弧に入れて示し、語尾へ添える pa も、無くっても言うことがあることを示す為に括弧を施した。又 kes は、「誰の kes」という関係で、すべて具体形 kese になる。

と述べ、金田一(op. cit. : 127 - 129) は、次のような動詞の変化の例を挙げている。

我、彼(等)を追う	kese-ku-ampa
我等(対他的)、彼(等)を追う	kese-chi-ampa
我等(包括的)、彼(等)を追う	kese-a-ampa
汝、彼(等)を追う	kese-e-ampa
汝等、彼(等)を追う	kese-echi-ampa
あなた(等)、彼(等)を追いなざる	kese-a-ampa(pa)
彼(等)、我を追う	en-kese-ampa(pa)
彼(等)、我等を追う	i-kese-ampa(pa)
	un-kese-ampa(pa)
彼(等)、汝を追う	e-kese-ampa(pa)
彼(等)、汝等を追う	echi-kese-ampa(pa)
我、汝を追う	e-kese-ku-ampa
我等、汝を追う	e-kese-chi-ampa
我、汝等を追う	echi-kese-ku-ampa
我等、汝等を追う	echi-kese-chi-ampa
我、あなた(等)を追う	i-kese-ku-ampa
我等、あなた(等)を追う	i-kese-chi-ampa
汝、我を追う	en-kese-e-ampa
汝等、我を追う	en-kese-echi-ampa
汝、我等を追う	un-kese-ampa [原文のまま—引用者]
汝等、我等を追う	un-kese-echi-ampa
あなた(等)、我を追う	en-kese-a-ampa(pa)
あなた(等)、我等を追う	un-kese-a-ampa(pa)

我、彼（等）を養う	paro-ku-oiki
我等、彼（等）を養う	paro-a-oiki
	paro-chi-oiki
汝、彼（等）を養う	paro-e-oiki
汝等、彼（等）を養う	paro-echi-oiki
あなた（等）、彼（等）を養う	paro-a-oiki(pa)
彼（等）、我を養う	en-paro-oiki(pa)
彼（等）、我等を養う	i-paro-oiki(pa)
	un-paro-oiki(pa)
彼（等）、汝を養う	e-paro-oiki(pa)
彼（等）、汝等を養う	echi-paro-oiki(pa)
我、汝を養う	e-paro-ku-oiki
我等、汝を養う	e-paro-chi-oiki
我、汝等を養う	echi-paro-ku-oiki
我等、汝等を養う	echi-paro-chi-oiki
我、あなた（等）を養う	i-paro-ku-oiki
我等、あなた（等）を養う	i-paro-chi-oiki
汝、我を養う	en-paro-e-oiki
汝等、我を養う	en-paro-echi-oiki
汝、我等を養う	un-paro-e-oiki
汝等、我等を養う	un-paro-echi-oiki
あなた（等）、我を養う	en-paro-a-oiki
あなた（等）、我等を養う	un-paro-a-oiki

さらに、このような動詞の変化について、金田一(op. cit. : 129) は、「之を要するに、主格、即「誰が」の関係に立つ人称辞は真中に入って、目的格、即ち、「誰を」の関係に立つ人称辞が最前へ置かれるのである」と特徴付けている。

注目すべきは、このような動詞的形式によって tomotuye 「横断する」のような動詞の語形成を説明していることである(金田一 1936 [1993] : 132)。すなわち、「これら(第三種の動詞—引用者)の熟合が完全に渾成して熟合のあとさえもないように進むと、tomotuye 「横断する」のごとくに、主格が語頭へ行ってしまうと不分離動詞化すると共に、前接(プレフィクス—原文ではルビ—引用者)になってしまふであろう。……その様に、enkese-a-ampa 「我があとあなたが追う」「我、あと追いかける」が、a-en-kesampa となって行けそうである。そうなると、第三類が、完全に第一類の活用になってしまう。」と述べている。この金田一の指摘は、アイヌ語の語形成論において避けて通ることのできない、極めて重要な指摘であることが、以下の考察において明らかにな

るであろう。

なお、金田一（1960 [1993] : 260 - 261）は、「Ⅲ 複合動詞 par-oiki「養う」の活用」という見出しを設けて、この動詞的形式の人称変化形を挙げているが、un-、en- を含む形式を挙げていないだけで、全体的には大きな変更は行ってないと言って良い。

2. 2. 知里真志保

知里（1936 [1974] : 84）も、金田一同様、第三類という名称を用い、基本的には同様な説明を行っているとも見て良いだろう。「第三類の動詞に於ては主格の人称接辞は全部接中し、目的格の人称接辞のみ接頭する」とし、「雅語」と「口語」のそれぞれについて、e-par(o)-a-oiki「我、汝を養ふ」等の変化形を挙げている（下記では例として「雅語」の人称変化を挙げる）。やはり、金田一と同じく、知里も主格のマーカが「接中」する、という点に、この語形変化の特殊性を見ているようである。ただし、目的格の人称接辞が par に接合した場合の変化形を par(o) と記述して、「目的格活用に於ける第Ⅰ人称第Ⅱ人称はそれぞれ「我に口に工作す」「汝に口に工作す」等の如き云ひ方で、「口に」を意味する par はそのまま抽象形が用ゐられる。但し具体形 paro を用ゐるも間違ひではない。然るに第Ⅲ人称に於てはそれ自身を示すべき何等の接辞もないので、彼に口に工作する」といふ代りに「彼の口に工作する」の如く云ふ。従つて第Ⅲ人称の時は規定詞は必ず具体化して paro となる。」（知里 op. cit. : 87 - 88）と述べている点に注意される。

I. sing. → II. sing.	e-par(o)-a-oiki	我 汝を養ふ
I. sing. → II. pl.	echi-par(o)-a-oiki	我 汝等を養ふ
I. pl. → II. sing.	e-par(o)-a-oiki	我等 汝を養ふ
I. pl. → II. pl.	echi-par(o)-a-oiki	我等 汝等を養ふ
I. sing. → III. sing.	paro-a-oiki	我 彼を養ふ
I. sing. → III. pl.	paro-a-oiki	我 彼等を養ふ
I. pl. → III. sing.	paro-a-oiki	我等 彼を養ふ
I. pl. → III. pl.	paro-a-oiki	我等 彼等を養ふ
II. sing. → I. sing.	i-par(o)-e-oiki	汝 我を養ふ
II. sing. → I. pl.	i-par(o)-e-oiki	汝 我等を養ふ
II. pl. → I. sing.	i-par(o)-echi-oiki	汝等 我を養ふ
II. pl. → I. pl.	i-par(o)-echi-oiki	汝等 我等を養ふ
II. sing. → III. sing.	paro-e-oiki	汝 彼を養ふ
II. sing. → III. pl.	paro-e-oiki	汝 彼等を養ふ
II. pl. → III. sing.	paro-echi-oiki	汝等 彼を養ふ
II. pl. → III. pl.	paro-echi-oiki	汝等 彼等を養ふ
III. sing. → I. sing.	i-par(o)-oiki	彼 我を養ふ

III. sing. → I. pl.	i-par(o)-oiki	彼 我等を養ふ
III. pl. → I. sing.	i-par(o)-oiki	彼等 我を養ふ
III. pl. → I. pl.	i-par(o)-oiki	彼等 我等を養ふ
III. sing. → II. sing.	e-par(o)-oiki	彼 汝を養ふ
III. sing. → II. pl.	echi-par(o)-oiki	彼 汝等を養ふ
III. pl. → II. sing.	e-par(o)-oiki	彼等 汝を養ふ
III. pl. → II. pl.	echi-par(o)-oiki	彼等 汝等を養ふ

知里 (op. cit. : 88) では、同様な変化をするものとして、以下のものを挙げている。

anrapok(i)-kari 負ける、ashke-uk 招き入れる、etok(o)-tuye 妨げる、kat(u)-kar ばかす、kes(e)-ampa 追ふ、kes(e)-kor 嗣ぐ、par(o)-oshuke 煮て食はす、ram(u)-horkare 「断念さす」、ram(u)-shitnere 悩ます、ram(u)-ye ねぎらふ、ram(u)-suye 強ひる、sam(a)-eanasap を心許なく思ふ、sam(a)-epash 併走する、tom(o)-oitak なだめる、tom(o)-kokanu 任せる

なお、知里 (1942 [1973] : 496) も、問題の動詞的形式について触れるところがあるが、「[摘要] (金田一の「アイヌユーカラ語法摘要」—引用者) では用詞 (動詞) を以上2種に分けただけであるが、それ以外にも特別の活用をするもののあることに気付いた筆者はそれを第3類と名づけて金田一先生の言語学演習のレポートとして提出した。その後金田一先生と共著の「概説」(『アイヌ語法概説』—引用者) では第3類としての活用をも挙げておいたが、それが本稿の第3種に相当するわけである。尚樺太では第3種はすべて第2種に転じてしまった」と述べるにとどまり⁽³⁾、樺太方言についての言及がある他は、特に新たな指摘はないようである。

2. 3. 田村すず子

田村 (1988 : 20 - 21) は、「1語のようにはたらく動詞句」という項目で、「2語からなり、常に続けて用いられ、1個の動詞のようなまとまった意義を表す一群の動詞句がある。その多くは、位置名詞と他動詞との結合である」(位置名詞に関する原文の括弧内の注記は省略—引用者)と述べ、以下の例を挙げている。

tom-o osma 「～にぶつかる」
 san etupsi tomo k-osma 「棚の端に私がぶつかった」
 e-tom k-osma 「あなたに私がぶつかった」

(3) 知里 (1942 [1973] : 495 - 96) によれば、第2種とは動詞のうち、a[n]-が接頭するものを指す。すなわち、概略的に言って、通常の他動詞と同じものとみてよい。なお、樺太では第3種が第2種になったと述べているのは重要な指摘であるが、具体例は挙げられていないので、樺太方言については今後の検討課題としたい。

eci-tomó k-osma 「あなた方に私がぶつかった」
 en-tom e-osma 「私にあなたがぶつかった」

上記のような動詞句と同様なものの例として、田村 (op. cit. : 21) は以下のような例を挙げている。

aske uk 「招待する」(lit. 手を取る)
 etok(o) oyki 「用意する」(lit. 前に行く)
 etok(o) tuye 「妨げる」(lit. 前を切る)
 ka(si) opas 「見舞いに走っていく」(lit. 上に走る)
 kes(e) anpa 「追う」(lit. 末尾を持つ)
 par(o) oyki 「養う」(lit. 口に行く)
 ram(u) ye 「ほめる」(lit. 心を言う)
 ram(u) suye 「なぐさめる」(lit. 心を揺らす)
 tom(o) oytak 「なだめる」(lit. 正面にものを言う)

なお、これらの例で () に入れて示されているのは位置名詞の「長形形式接尾辞」⁽⁴⁾で、これは、「目的格人称接辞の種類および有無によって、これらの形式は長形になったり、ならなかったりする」と述べ、さらに、これらの語に、「u-「互い」、yay-「自分」、i-「不定の人/物」が接頭するとき、それぞれ1語となる」とし、以下のような例を挙げている (田村 ibid.)。

u-tom-osma 「互いにぶつかり合う」
 u-tom-osma-re 「互いにぶつけ合わせる」(-reは、使役語尾)
 a-u-tóm-osma-re 「(一般に、人々が) 互いにぶつけ合わせる」= 「ぶつけ合わされる」

田村の記述は、簡潔ながら、語形変化について知里が述べていない条件 (目的格人称接辞の有無のみならず種類も問題となる点) に言及しており、また、明らかに一語とみなし得る派生語の存在にも触れているという点で注目に値する。もっとも、問題が全くないわけではない。例えば、「その多くは、位置名詞と他動詞との結合である」(下線は引用者) という表現によって、位置名詞以外の名詞が現れる可能性を示唆して、実際に par(o) oyki 「養う」、ram(u) ye 「ほめる」の par(o) 「口」、ram(u) 「心」のような、そのままでは位置名詞とは通常考えられない実例も挙げていながら、そのすぐ後の説明では「() に入れて示されているのは位置名詞の……」と表現して、あたかもすべてが問題なく位置名詞であるかのような記述を行っているのは、厳密には整合性に若干の不

(4) 田村 (1988 : 35) は、概略的に言って、位置名詞の概念形に接尾辞のついた形式を長形と呼んでいるようである。

足が感じられる。

以上のように、田村の記述は従来の説明から見ると簡にして要を尽くした極めて優れたものと言えるが、細部ではなお一考の余地を残していると言えよう。

2. 4. 中川裕

中川 (1995: 7) は、問題の動詞的形式を「連動詞」という用語で呼び、以下のような説明を与えている。少し長くなるが引用する。

アイヌ語の動詞の中には目的語である名詞と他動詞とが、特別な様式で結びついているものがある。これを連動詞と呼ぶことにする。連動詞の意味は、目的語の名詞と動詞との意味を足し合わせたものではなく、慣用句同様にそれ独自のものを持つのが特徴である。例：カ オパシ ka o-pas「～の上・～へ・走る」＝「～を助けに行く」、パラ オイキ par o-iki「口・～へ・する」＝「～を養う」。

また、普通の名詞と他動詞の組み合わせであれば、目的語である名詞の所有格は主格接辞で表されるのに対し、連動詞の場合には目的格で表される。たとえば、クパロ アケレ ku=paro a=kere「人が私の口を触る」は、名詞と動詞の一般的な組み合わせであり、パロ「口」は主格接辞のクをとっているが、それに対し、連動詞パラ オスケ par osuke「～の食事の世話をする」の場合には、エンパロ アオスケ en=paro a=osuke「人が私の食事の世話をする」のように、目的格接辞エンをとる。

連動詞の前部要素は位置名詞か、身体名称など限られた意味の普通名詞であり、それぞれ長形あるいは所属形 (後述) をとるので、カ、-シ オパシ ka, -si opas のように表記する。これはカ オパシという形にもなるし、カシ オパシという形にもなるという意味である。また、連動詞はひとつの動詞としても機能し得るので、イカオパシ i-kaopas のような形にもなる。

中川の記述は、この動詞的形式を二語とみなす点では田村と同様であり⁽⁵⁾、また、簡潔ではあるが、最後に、一語化する場合のあることにも触れている。さらに、構成素となる名詞について、「位置名詞か、身体名称」と述べている点は、田村の記述よりも一歩進んだものと言うことができる⁽⁶⁾。

(5) もっとも、本文 (中川 1995: 171) では i=kesanpa「我々を追いかける」のように一語のように表記した例も見られ、また、中川が一語の例として挙げているイカオパシが、派生の例なのか屈折の例なのかの説明もないので、中川の真意がいかなるものであるのか、必ずしも明確でない点がある。

(6) もっとも、中川は en=paro a=osuke のように、paro という形式を含んだ人称変化形を挙げているが、これは、例えば、田村の en-tom e-osma (*en-tomo e-osmaではなく) のような例と必ずしも名詞の形式 (接尾辞を取るか取らないか) が一致しない。これがいかなる原因によるものなのか、方言差によるものなのか、あるいはなんらかの文法的な要因によるものなのかは、なお一考の余地を残していると言える。なお、筆者の資料にも i-paro a-oyki「人が私を養う、私が養われる」という例がその後、一例 (言いよどみの後ではあるが) 現れていることを付言する。現時点で考えられる要因としては、par「口」は、常に所属形で起こる kew「体」のような身体名詞

2. 5. 従来の記述のまとめと問題点

重複する点もあるが、ここで再度、金田一、知里、田村、中川それぞれの記述の主要な共通点と相違点をまとめると以下ようになる。

- A. 金田一、知里は、問題の動詞的形式を全体として一語とみなし、主格人称接辞が接中したものとみているが、同様な例を、田村、中川は二語からなる句とみている（さらに、中川は「連動詞」という用語を新造して、これらの形式に対してアイヌ語の文法構造の中に独自の地位を与えている点が注目される）。
- B. 金田一は人称変化の際、名詞はすべて所属形（par「口」に対する par-o「～の口」のような形式。金田一の用語では「具体形」）を取るとする記述を行っているが、知里は、1、2人称の人称接辞が付いた場合は所属形（具体形）の使用は随意的だが、三人称で、有形の人称接辞が付かない場合は所属形の使用は義務的となる、としている。田村は、ややあいまいな表現ながら、人称接辞の有無だけでなく、その種類も問題となる場合があることを指摘し、en-tom に対して、eci-tomó という形式を例として挙げている。これに対し、中川は田村の記述とは必ずしも対応しない「en=paro a=osuke」のような所属形を含む例は挙げているものの、所属形の使用条件については特に述べていない。
- C. 田村、中川は utomosma、ikaopas のように、一語とみなし得る関連の形式があることに触れている。特に、田村は、「u-「互い」、yay-「自分」、i-「不定の人／物」が接頭するとき、それぞれ1語となる」と、一語となる場合の条件を明示している。

A. の「一語か二語か」という問題に関しては、理論的のみならず、辞書記載の際の便宜のような実際の観点も関係して来るので解決は必ずしも容易でないが、金田一や知里が一語と表記している例を、田村、中川のように二語と考えることには、以下で明らかになるように十分な根拠があり、従って金田一、知里が指摘している主格人称接辞の「接中」という現象は今日ではそのままは認めることはできず、再検討を要すると言ってよいであろう。B. は、問題の動詞的形式の中に含まれる名詞が、所属形（具体形）となるかどうかという点であるが、この点については田村の記述が最も詳しく、説得力がある。もっとも、それぞれの研究者が基づいている方言の問題や、調査年代の

と、有形の人称接辞の場合には概念形を取る典型的な位置名詞との中間に位置する性格を持つ（pa は pa - 「口」+or「所」の可能性もある。中川裕の示教による）ので、概念形と所属形の両方が有形の人称接辞と現れ得るのだ、という解釈の可能性もあろう。さらに、もしこれが事実とすれば、3人称主語の場合に、有り得る筈の i-par-o という所属形の例がこれまでのところ現れていない点は、その点だけを見ると、（本稿の結論には反するが）全体として一語化しているという解釈を支持する証拠となり得るかもしれない（なお、注8も参照）。いずれにせよ、今後の資料の増加によっては中川の挙げている en-paro a-osuke のような形式が千歳方言においては必ずしも例外的形式ではないことが判明するかもしれないが、現時点では例の総数、および位置名詞以外の名詞の例そのものが少ないため、仮説として述べるに留める。

問題も関わるため、一概に結論は出せず、この点については、なお検討の余地を残していると言ってよいであろう。C. は、u-tom-osma「互いにぶつかり合う」のように、特定の接辞を取って一語となる場合について述べたものであるが、e-tom k-osma「あなたに私がぶつかった」のように一語とならない場合との差異についてはこれ以上の考察はいずれの研究者によってもいまだなされていないようである。

以上のように、問題の動詞的形式は、早くから（より詳しくは昭和11年の金田一、知里の論文及び文法記述以降）研究者の注目を集めて来たものの、語形変化（特に所属形の関わる場合）等に関する記述的研究も必ずしも万全ではなく、また、なによりも、アイヌ語の構造全体において、この形式がいかなる地位を有するのか、すなわち、このような語と句の両方の性質を示す動詞的形式がアイヌ語に存在する意義とはいったい何か、という問題は、十分には考察されて来たとは言えない点があると言って良いであろう。

以上から、主な問題点を簡潔にまとめると以下のようになろう。

- A. 問題の動詞的形式は語か句か。
- B. 人称変化の際の名詞の所属形の出現条件は何か。
- C. 人称変化（屈折）と派生とで形式が異なるのはなぜか。

これらの問題点に留意しつつ、以下では千歳方言における事例をみることにしよう。

3. 千歳方言における「第三類の動詞」の特徴

以下では、筆者が実地調査によって得たデータに基づいて、千歳方言におけるこの種の動詞的形式の用法をみることにする。

3. 1. 音声的特徴

3. 1. 1. 声門閉鎖音の有無

必ずしも必要十分な基準ではないと思われるが、アイヌ語では、一般に、一語とみなすことに特に問題がないとみられる形式では、子音で終わる形態素に母音で始まる形態素が連続した場合、一音節を形成するのが一般的で、音節の境界をなす声門閉鎖音が現れることは、場合によっては皆無とは言えないまでも、それほど一般的ではないと言える。例えば、cep「魚」に eyayparoyki「～で口を糊する」が合成されると、通常は cepeyayparoyki のように続けて発音される。このような観点から、問題の動詞的形式が、子音で終わる名詞に母音で始まる動詞が連続した形式である場合について調べてみると、以下のような結果が得られた。

i-par a-oyki「人が私を養う、私が人に養われる」は1例あるが、これは [iparajki] のように発音されている。語境界（この点については3. 3節も参照）をまたいで語末子音 r がその次の人称接辞 a と連続して発音される例は（私のデータでは）これまでのところ他に確実な例がない。

i-par eoyki「彼が私を～で養う」は5例中4例が [ipareojki] のように発音されているが [ipar'eojki] と発音されている例も1例ある。なお、ゆっくり区切った発音では i-par-e-oy-ki [i-par-'e-'oj-ki] の

ように発音されるのを観察している（ちなみに、a-ewparoyki「我々が〜で養いあう」は a-e-u-pa-ro-i-ki [a-e-u-pa-ro-i-ki] のように区切って発音されているのは興味深い）。

i-par osuke「彼が私に炊事してくれる」は1例あり、[iparosuke]と発音されている。

kes anpa は40例中1例のみ [kef' ampa] と発音された例 (/enkes' anpa/「彼が私を追う」) があるが、他はすべて [kesampa] と発音されている。

例が少ないため、断定的なことを言える段階ではないが、声門閉鎖音を入れずに続けて発音される例が多いのは、音声的な「まとまり」が固いことを示すものかもしれない。金田一、知里のような初期の研究者が問題の形式を「一語」のように扱ったのも、その根拠の一つはおそらくこのような声門閉鎖音の脱落等による音声的な一体度の強さのためであろうと思われる。もっとも、例は少ないものの、語境界とみられる箇所にも声門閉鎖音が挿入される例もごく少数ながら存在する点は、やはり軽視できないと思われる。

3. 1. 2. アクセント

この点についても、確実なことを述べるにはなおデータの検証が必要であるが、これまでに得られているデータについて調べてみると、問題の形式については以下のような状況であった（音節ごとの高さを、L（低）、H（高）の略号で示す）。

en-kes anpa [enkesampa] HLHL (1例), HLLL (2例)

i-kes anpa [ikesampa] LHLL (3例), LHHL (5例)

i-ka opiwki [ika' opiwki] LHHHL (1例)

i-ka oyki [ika' ojki] LHHL (1例)

i-ka oykipa [ika' ojkipa] LHLLL (1例)

i-ka a-oyki [ika' a' ojki] LHLHL (2例)

i-par a-oyki [ipara' ojki] LHLHL (1例)

すべての方言ではないが、アイヌ語は「昇り核アクセント」を有する言語と言われる⁽⁷⁾。詳細は論じないが、これまでのデータに基づけば、千歳方言も昇り核アクセントを有する方言と言ってよいと思われる。従って、原則的には、アクセントのある語は必ず少なくとも一つの「H（高）」核

(7) 田村 (1988: 13) 等を参照。

を有するはずである⁽⁸⁾。繰り返し述べているように、データ不足のため、この点について何かを言える段階にないが、「H (高)」の現れる位置に注目すると、上のデータを見る限りでは、二つの構成素それぞれに「H (高い)」が現れる例が多い (12例) ように見える。が、それでもやはり i-kes anpa (L-HLL 3例)、en-kes anpa (H-LLL 2例) のように全体として「H (高)」を一つしか有しない例もあることが注意される。すなわち、アクセントに関しては、必ずしも高い音声的緊密性を示しているとは言えない例が、音声的な緊密性を示していると考えられる例よりも、どちらかと言えば多いようであるが、両方が見られることは確かであり、やはり問題が残ると言える。

以上のように、音韻のプロセス (声門閉鎖音の有無) や、アクセントのような音韻的基準において、高い緊密性を示す事例のあることは明らかとなったが、それだけでは問題の形式が語か句かを決定できないと思われる。

3. 2. 構成素となる名詞の特徴

これまでのところ、千歳方言においてみられる「第三類の動詞」には、以下のようなものがある。

A. 位置名詞を含むもの

ka opas, ka-si opas 「～を助ける」 (ka 「上」)

ka opiwki, ka-si opiwki 「～を救う」

ka ose, ka-si ose 「～を～に持って行ってあげる」

ka oyki, ka-si oyki 「～を世話する」

kes anpa, kes-e anpa 「～を追いかける」 (kes 「端」)

tom osma, tom-o osma 「～に勢いよく、まともにぶつかる」 (tom 「真ん中」)

tom oytak, tom-o oytak 「～をなだめる」

B. 位置名詞以外の名詞 (主として身体名詞) を含むもの

aske uk 「～を招待する」 (aske 「手」)

kewe homsu 「～の危機脱出をねぎらう、無事を喜ぶ」 (kew 「体」)

(8) 査読者のお一人から、i-ka opiwki が核を一つしか有せず、一語のように発音されている例こそ (明らかに opiwki が核を失っている) で音声的な一体度の強さの証拠としてあげるべきではないか、というご指摘があった。その通りであるが、例が1例しかないため、ここでは特に取り上げなかったことを付言する。今後、資料の精査とともに、他の研究者からの報告を切望するものである。もっとも、筆者がここで指摘したかったのは、音声的な一体度が強いように見える例もあるけれど、必ずしもそうとは言い切れない例もあり、音声的な基準だけで当該形式の性質を決定することには問題がある、という点なのである。なお、この問題の解決には、句のアクセント現象の解明も不可欠であり、名詞句の第二要素の核の消失現象 (篠崎俊幸の示教による) なども考慮すると、そう単純なものではない可能性がある。また、ao という母音連続を含む点も問題となろう。ちなみに、この査読者の方からは3人称主語の場合は1語、それ以外の場合は2語という解釈が自然なのは、というご指摘もいただいたが、なぜ「自然」と言えるのか、という点が管見の及ぶ限り、これまでのアイヌ語研究において自覚的に問題とされてこなかったことこそが問題なのであり、それゆえ本稿でこの問題を音声、文法の両面から改めて考察しているわけである。

par oyki, par-o oyki 「～を養う」(par 「口」)
 par eoyki, par-o eoyki 「～を～で養う」
 par osuke, par-o osuke 「～のために炊事する」

今後のデータの検討がなお必要ではあるが、中川(1995:7)が述べているように、構成素となる名詞は位置名詞であるか、身体名詞であるかの、いずれかであると言ってよい。ただし、これまでのところ、確実な例としては一例しか見いだされていないが、形態上、異質なものであることが注意される。すなわち、kewe homsu 「～の危機脱出をねぎらう、無事を喜ぶ」は、kewe という形式を含んでおり、これは、kew 「体、死体」に所属形形成接尾辞が接尾した所属形と考えられる。しかし、他の動詞的形式が、主として目的格人称接辞の有無(後述)によって、構成素となる名詞に関してたとえば par (概念形)、par-o (所属形) のような概念形と所属形との交替を示すのに対し、kewe homsu は常に kewe (所属形) を含み、他の例から予想される kew (概念形) との交替を示さない。なぜ、この場合交替しないのか、また、このような例が他にもあるのか⁽⁹⁾、問題となるところである。今後の検討課題である。

3. 3. 人称変化

この動詞的形式の性格を知る上で大きな手がかりとなると思われるのは、やはり人称変化の形式である。データが必ずしも十分でなく、不明な点も少なくないのであるが⁽¹⁰⁾、これまでのところ明らかとなっている第三種の動詞の千歳方言における人称変化は、以下のようにまとめられる。

A. 位置名詞到有形⁽¹¹⁾の人称接辞(1人称、2人称、不定人称)が接合する場合⁽¹²⁾

目的格人称接辞	+	位置名詞概念形	+	主格人称接辞	+	他動詞
en-		kes		φ-		anpa
1SG. OBJ -		端		3SG. SUBJ -		つかむ

「彼が私を追いかける」

(9) ramu a-suye 「私が～をなだめる(lit. ～の心を私が揺らす)」がひょっとすると同じパターンを示すかもしれないが、有形の目的格人称接辞の現れた例がない。今後の課題である。

(10) 例えば、eci- (2人称複数)の例は、これまでのところ筆者のデータに現れていない。なお、田村(1988:21)は、eci-のあとに所属形 tomo の現れる例を挙げている。綿密なフィールド調査の重要性を痛感させられる例である。千歳方言ではどうなのか、今後もデータを精査して、できれば明らかにしたいものである。

(11) 千歳方言に限らず、アイヌ語の人称表示において3人称は無標である。これをゼロ形式(φ-)とみなす解釈が一般的だと思われるが(田村 1988:22)、特に問題とする場合以外は3人称のゼロ形式を表記しないことが多い。なお、φ-の接合位置については、有形の接辞の場合との平行関係だけでは証拠が不足であり、なお検討の余地がある。

(12) 以下の例の説明では次のような略号を用いる。1(1人称)、2(2人称)、3(3人称)、SG(単数)、INDEF(不定人称)、TR(他動詞)、INTR(自動詞)、SUBJ(主格)、OBJ(目的格)、POSS(所属形形成接尾辞)、CAUS(使役)

B. 位置名詞にゼロ形式 (3人称) が接合しているとみられる場合

(名詞)	+	目的格人称接辞	+	位置名詞所属形	+	人称接辞	+	他動詞
cironnup		φ-		kes-e		k-		anpa
キツネ		3SG. OBJ		端 - POSS		1SG. SUBJ -		つかむ

「私がキツネを追いかける」

C. 身体名詞に有形の人称接辞 (1人称、2人称、不定人称) が接合する場合

目的格人称接辞	+	身体名詞概念形	+	人称接辞	+	他動詞
i-		par		a-		oyki
1SG. OBJ -		口		INDEF. TR.SUBJ -		～について何かをする

「人が私を養う、私が養われる」

D. 身体部位名詞にゼロ形式 (3人称) が接合しているとみられる場合

(名詞)	+	目的格人称接辞	+	身体名詞所属形	+	主格人称接辞	+	他動詞
a-kor acapo		φ-		par-o		a-		oyki
私のおじさん		3SG. OBJ -		口 - POSS		1SG. TR.SUBJ -		～について何かをする

「私がおじさんを養う」

E. 人称接辞が有形か無形かに関わらず身体名詞所属形が起こる場合⁽¹³⁾

i-kew-e		a-		homsu
1SG. OBJ - 体 - POSS		INDEF. TR.SUBJ -		～の無事を喜ぶ(?)

「人が私の無事を喜ぶ」

taan kur		φ-kew-e		ku-homsu
この人		3SG. OBJ - 体 - POSS		1SG. SUBJ - ～の無事を喜ぶ(?)

「私がこの人の無事を喜ぶ」

繰り返しになるが、データの不足のため、細部に関しては不明の点が少なくない。そのことは承知の上で、概略的ではあるが、人称接辞の有無によって構成素の名詞が概念形で現れるか、所属形

(13) aske uk の場合、aske は概念形とも所属形ともみなせるので、ここでは扱わなかった。

で現れるかが決定される、という状況であると言って良いと思われる⁽¹⁴⁾。また、これは、田村(op. cit.)の記述している沙流方言と、ほぼ事情が同じであると見てよい。

このような有形の人称接辞の有無による語形変化の違いは興味深いものであるが(後述)、それとは別に、人称変化のパターンは、この形式が語であるか、句であるかについて重要な手がかりを与えるという点で、この形式の理解において極めて重要である。すなわち、C. の i-par a-oyki のような例は、主格人称接辞 a- が oyki の前にあることから、語としては a-oyki の段階で、いわば「閉じて」しまい、それ以上、a- の前に派生、合成のための構成素を取ることはアイヌ語では不可能と考えられる。従って、i-paroyki [iparoyki] のように通常続けて発音されるものも、人称変化の点では i-par φ-oyki と解釈して、やはり2語からなる句だ、と考えることが可能になるわけである。田村、中川は明示的には述べていないが、やはりこのような人称変化のパターンを手がかりとして、この形式を「句」と見ているのではないかと思われる。

なお、中川(1995:7)は、前に引用したように、「また、普通の名詞と他動詞の組み合わせであれば、目的語である名詞の所有格は主格接辞で表されるのに対し、連動詞の場合には目的格で表される。たとえば、クパロ ア ケレ ku=paro a=kere 「人が私の口を触る」は、名詞と動詞の一般的な組み合わせであり、パロ「口」は主格接辞のクをとっているが、それに対し、連動詞パヲ オスケ par osuke 「～の食事の世話をする」の場合には、エンパロ アオスケ en=paro a=osuke 「人が私の食事の世話をする」のように、目的格接辞エンをとる」と述べて、通常は主格接辞を取る名詞が目的格接辞を取る点に注意を喚起している。この現象は、位置名詞は通常目的格人称接辞を取って人称変化するので、par 「口」もここでは位置名詞的に用いられているために、目的格人称接辞を取っているのだ、とひとまず考えることもできるが、検討を要する。なお、この問題は派生とも関連性を持っているので、次節でも触れる。

3. 4. 派生形

これまでみてきた形式は、人称変化からみて二語からなる句である可能性の強いものであったが、それらの他に、明らかに一語とみなし得る、派生接辞が接合して形成されたとみられる派生形の存在する場合がある。すなわち、以下のようなものである。

yayparoyki (-an)⁽¹⁵⁾

yay-par-oyki (-an)

自分 - 口 - ～について何かをする (-[SG. INTR. SUBJ])

「(私が) 自分で口を糊する」

(14) 人称の種類によってなぜ概念形と所属形の交替が見られるのかは興味深い問題であるが、今後の研究課題としたい。ここではor「所、場所」が多少例外的なふるまいをするのを除き、位置名詞に広くみられる現象であることを指摘するにとどめる。なお、Sato (1997) もこの問題に関連する議論を含んでいる。

(15) a- (不定人称他動詞)、-an (不定人称自動詞)は、「私が、私達が、あなたが、あなたたちが」等の様々な意味を持つが、ここでは煩雑なので1人称の訳語で代表させた。

(a-) ewparoyki

(a-) e-u-par-oyki

(ISG. TR. SUBJ) ～で - 互い - 口 - ～について何かをする

「(私達が) ～で互いに養いあう」

ikaopas (-an):⁽¹⁶⁾

i-ka-opas (-an)

INDEF. OBJ - 上 - ～に走る (-ISG. INTR. SUBJ)

「(私が) 人を助ける」

(a-) sikaopaste:

(a-) si-ka-opas-te

(ISG. TR. SUBJ) - 自分 - 上 - ～に走る - CAUS

「(私が) ～に自分を助けてもらう」

これらの動詞が人称変化した場合、これまで示してきた二語からなるとみられる変化とは異なり、他の明らかに一語と考えられる動詞と同様の人称変化を行う (yayparoyki-an 「私が自分の口を糊する」、a-ewparoyki 「我々が～で互いに養いあう」、ikaopas-an 「私が人を助ける」、a-sikaopaste 「私が自分を～に助けてもらう」のように、語全体に人称接辞が接合する)。

ところで、このタイプの派生語は、アイヌ語の語形成の中ではある意味で特殊なものである。なぜなら、アイヌ語では、他動詞に目的語が合成 (抱合) されると自動詞になる (佐藤 1992: 197) のが通例であるのに、yayparoyki のような例は、oyki 「～について何かをする」 (他動詞) に par 「口」が抱合されても、さらにもう一項 yay- 「自分」という派生接頭辞を取れるという点で特異である。複数の理論的な可能性はあると思われるが、一つの可能性としては、yay- がまず par の所有者として結合し、そうしてできた yaypar という形式が oyki と合成された、と考えれば、一応説明することは可能と思われる⁽¹⁷⁾。

さて、動詞価の理論的解釈はともかく、ここで問題となるのは、3. 3. で述べた人称変化と 3. 4. の派生との対比である。人称変化と派生とは、ある面では共通点を持ちながらも異なる振る舞いを見せる。

(16) i-ka opas 「彼が私を救う」という例は句で、i-は「私を、私達を」等を意味する人称接辞であるが、ここでの i-kaopas の i- は具体的な指示対象を持たない派生接頭辞であると考えられる。

(17) ここで詳しく論ずることはできないが、この分析はわかりやすいけれども、yaypar のような形式が、単独では通常用いられず、後ろに (恐らくは) 他動詞、または後置詞のような一種の目的語を取る形式を要求する特定の環境にしか起こらない点から考えて、再考の余地があると思われる。なお、注(8)も参照。ちなみに、接辞ではあるが、アイヌ語には e- 「～の頭」、o- 「～の尻」と説明される所有者を項として取る形式があり (田村 1973: 88)、これらの形式との関係も今後問題となろう。

すなわち、人称変化の中、有形の人称接辞が構成素の名詞の前に現れた場合、その名詞は通例概念形で現れるが、派生と屈折の違いはあるけれども、派生接頭辞も有形の接頭辞であるから、この点では人称変化とある種の共通性を持っていると言える⁽¹⁸⁾。両者の相違点は、派生接辞が付いた場合には名詞は動詞に合成（抱合）されて一語となるが、人称接辞の付いた場合は抱合されず、語の外に置かれる⁽¹⁹⁾、という点である。これをまとめると次のようになる。

有形の目的格人称接辞	概念形 ⁽²⁰⁾	抱合不可能
ゼロ形式（3人称）	所属形	抱合不可能
派生接辞	概念形	抱合

すなわち、抱合されるかされないかは、人称変化（屈折）か派生かによって決定されているとやって良いような状態であることがわかる。理論的な解釈には問題が少なくないけれども、動詞価（valency）という点では、yay-「自分」、u-「互い」、i-「それ、もの」のような派生接頭辞を一項として取り得る動詞が、その一方で人称接辞を項として取ることができないようにみえる⁽²¹⁾、というのは非常に興味深い現象である。この点については5節で再び扱う。

4. 意味的、統語的特徴

「第三種の動詞」の意味的側面については、「常に続けて用いられ、1個の動詞のようなまとまった意義を表す」（田村 1988：20-21）、あるいは「連動詞の意味は、目的語の名詞と動詞との意味を足し合わせたものではなく、慣用句同様にそれ独自のものを持つのが特徴である」（中川 1995：7）のような指摘が既になされており、この形式が意味的には辞書に独立の見出し語として記載するのがふさわしいような意味の特殊化を起こしていることが指摘されている。また、人称変化の観点からは句とみなし得るような性質を有していることは既に述べたが、厳密に言うと、やはり通常の句とは異なる点もある。一例をあげれば、名詞の所属形には短い形と長い形があり（田村 1988：34-35）、例えば par「口」の所属形は par-o であるが、par-o-ho という長い形もある。通常の句では par-o と並んで par-o-ho も用いられるが、*par-o-ho oyki という形式はこれまでのとこ

(18) 第三類の動詞において名詞が目的格人称接辞を取るの、派生において抱合された名詞概念形が、（今は詳述の暇がないが）目的格的な i-, u-, yay- のような接辞を取ることと類似性を持っていると言える。その解釈の可能性は色々あると思われるが、名詞が場所的な解釈を受け得ると考えられる場合が多いことは常に考慮する必要があると思われる。あるいは、推測の域を出ず、理論的な表現ではないが、第三類の動詞における名詞が主格でなく目的格の人称接辞を取るの、動詞の外にある場合でも、派生によって抱合された名詞と同じ程度に動詞とのある種の強い結び付きを持っているためではないかと考えることもできる。もしそうだとすれば、第三類動詞は形態論的、統語的に語と句の中間に位置するユニークな形式、ということになるかもしれない。

(19) ただし、i-ka oyki「彼が私の世話をする」のような事例については、体系的な観点から抱合ではないという立場を取っているが、考察不足を認めざるを得ない。今後の検討課題である。

(20) なお、注(6)も参照されたい。

(21) ただし、注(19)のような事例については検討の余地がある。

る例がない。また、通常の句では、目的語と動詞の間に他の語（副助詞など）が入り得るが、理論的には十分可能と思われる、例えば *paro ka oyki (ka「も」、副助詞) のような形式も見いだされていない。また、paro と oyki の間に主語名詞句が置かれた例もこれまでのところ見いだされていない。これらは、音声的なまとまりの強さと相まって、問題の形式の位置付け（語か句か）を困難にしていると言える。

5. 「第三類の動詞」の特徴のまとめとアイヌ語語形成論における意義

以上、簡略ではあるが、概観して来たように、千歳方言を例に取ると、「第三種の動詞」は次のような特徴を持っていることが明らかとなった。

- A. 声門閉鎖音を伴わず、一語のように発音されることが多いが、他方、アクセントの点では二語からなる句のように発音されることが少なくなく、これらの音声的な特徴だけでは、語か句か必ずしも判然としない点がある。
- B. 人称変化の観点からは、二語からなる句のような様相を示す例がある。
- C. 派生の場合、名詞は抱合される。人称変化の場合、判別が困難な事例（3人称主語、1、2人称目的語）もあるが、Bから明らかなように抱合とは明らかに異なるパターンを示す場合がある。
- D. 意味的には語彙化しており、統語的プロセス（等価的な語形の置換、他の語の挿入）も恐らく不可能。

これらのほとんどは、先行研究でもある程度触れられていたものであるが、C. については、その意義を少しく述べたい。佐藤（1992：198）は、アイヌ語の抱合について「他動詞が名詞の所属形を抱合している確実な例はないようである……（中略）……アイヌ語において、自動詞では可能な所属形の抱合が、他動詞ではみられないことがわかる」と述べている⁽²²⁾。結論的に言うと、本稿で論じた「第三類の動詞」は、この佐藤の指摘を概して裏付けるものであるということが出来る。

「第三類の動詞」が存在する理由の少なくとも一つは、語としての統一性を破ってまで、他動詞が名詞（特に位置名詞）の所属形（及び概念形に人称接辞の付いた人称形⁽²³⁾）の抱合を拒否する、と

(22) 現時点でも自動詞と他動詞で名詞人称形（注23も参照）の抱合に関するふるまいが異なることの説明は完全にはできていない。IPの支配位置（自動詞の場合）とVPの支配位置（他動詞の場合）という構造的な差に加えて、ここでは、他動詞は二項以上項を持つので、関与者（所属形名詞の所有者）の同定が自動詞に比べてより困難になる（自動詞では再帰的解釈のみで良いが、他動詞では非再帰的解釈の可能性も必要）だろうという予測を述べるにとどめる。なお、Spencer（1995：450）は抱合された目的語が動詞の外の要素を所有者として取れる言語としてチュクチ語の例を挙げているが、場所的に解釈し得る可能性もあり（佐藤 1992：196）、必ずしも問題がないわけではない。従って、アイヌ語の抱合における所属形目的語抱合の制約が、通言語的な制約と関わっている可能性は十分あると思われる。

(23) 概念形に目的格人称形の付いた形式も所属形（すなわち3人称接辞の付いた形式）も、同じく人称変化に関与する形式であるので、「所属形は抱合されない」という表現よりも、両方とも「人称形は抱合されない」という表現で一括できるかもしれない。ただし、注(19)のような事例をどう考えるかによって、人称形と所属形を別々に

いうアイヌ語の形態論上の制約の結果である、と考えられる。音声的な結合、統語的な結合も通常の句よりも強いという特徴を持ち、意味的にも一語としての性格を備えている（現に派生語は明らかに一語である）にもかかわらず、形態的には名詞と動詞が分離して現れる場合があるのは、この制約がアイヌ語において非常に強いものであることを示すものと考えられる。

ここで興味深いのは、金田一（1936 [1993] : 132）が第三類の動詞と構造が同じであると考えられるにもかかわらず、名詞と動詞の分離を起こさない例外として挙げている tomotuye「横断する」という動詞の例である⁽²⁴⁾。この語は千歳方言においても常に tomotuye という形式で用いられ、名詞と動詞が第三類の動詞の如く分離することはない（例：pet ku-tomotuye「川を渡る」）。実は、佐藤（loc. cit.）の指摘から明らかなように、このような所属形の抱合とみられる確実な例はアイヌ語において非常に少なく⁽²⁵⁾、もし tomotuye が tom-o「～の真ん中」⁽²⁶⁾ と tuye「切る」の抱合の例と考えると、なぜこの動詞が他の動詞と異なり、このような所属形の抱合を例外的に許すのか、説明困難となる。なおも検討が必要であるが、tomotuye は tom の所属形 tom-o が抱合されたものと考えべきではなく、概念形 tom が o-tuye「～で切る」に抱合されたもの（tom-o-tuye「lit. 真ん中・で・切る」）とみなすほうが、本稿で行った体系的な考察の結果からみて妥当な解釈である可能性がある。

なお、名詞の所属形（及び恐らくは人称形も）が抱合されないのは、佐藤（1992 : 199）が既に指摘している、アイヌ語の抱合において特定性の高い名詞は抱合できない、という観察と一致する。これに対して、派生接辞の付いた名詞が抱合されるのは、派生接辞の指示対象が yay-「自分」、u-「互い」、i-「それ、もの」のように、特定の対象を指さないからであると統一的に説明することができる。

6. 終わりに

アイヌ語の「第三類の動詞」をめぐる問題には、方言差、名詞の所属形、人称形、位置名詞と普通名詞、抱合、特定性等のような、多数の領域の問題が関係しているとみられ、本稿も千歳方言における問題の形式の記述的な概略を述べるにとどまり、首尾一貫した理論的考察を行うまでには至っていない。今後は本稿で立てた仮説を検証するために、例外的事例の収集と、他方言（特に樺太方言）のデータの検討を行いながら、理論的側面の研究をさらに行っていきたいと考えている。

扱うほうが妥当である可能性もないわけではない。

(24) 知里（1973 : 69）、田村（1996 : 721）も金田一と同様、所属形の抱合と考えているようである。

(25) これまでのところ得られている例としては、eramuosma「承知する」の ramu「～の心」がほとんど唯一の所属形目的語の抱合の例である。この種の例外（身体、親族名詞）の説明は別稿に譲る。

(26) tomを「真ん中」と訳したが、川のようなパイプ状（？）の対象では、その「芯」の部分をもともと指すのではないかと考える。勿論、現実には川の中線を実際に船が通過するわけもないが、比喩的に表現しているわけである。

追記

原稿の段階で細かい点にまで御注意下さったお二人の査読者の方々に深く感謝の意を表します。
なお、本稿は平成12年度科学研究費(特定領域A、基盤C)の成果の一部である。

参考文献

- 知里真志保. 1936[1974]. 『アイヌ語法概説』. 東京: 岩波書店. (復刻. 『知里真志保著作集』4. 東京: 平凡社.)
- . 1942 [1973]. 「アイヌ語法研究—樺太方言を中心として—」. 『樺太庁博物館報告』第4巻第4号. (復刻. 『知里真志保著作集』3. 東京: 平凡社.)
- 金田一京助. 1931. 「アイヌユーカラ語法摘要」. 金田一京助. 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』2. 東京: 東洋文庫. 1 - 233.
- . 1936[1993]. 「アイヌ動詞の第三類—複合動詞の人称形に就て—」. 『随筆ゆうから』. (復刻. 『金田一京助全集』5. 東京: 三省堂.)
- . 1960[1993]. 「アイヌ語学講義」. 『金田一京助選集』1. (復刻. 『金田一京助全集』5. 東京: 三省堂.)
- 中川裕. 1995. 『アイヌ語千歳方言辞典』. 東京. 草風館.
- . 1997. 『エクスプレスアイヌ語』. 東京: 白水社.
- Radford, A. 1988. *Transformational Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 佐藤知己. 1992. 「「抱合」からみた北方の諸言語」. 宮岡伯人(編). 『北の言語』. 東京: 三省堂. 191 - 201.
- Sato, T. 1997. Possessive Expressions in Ainu. Hayashi, T. and Peri Bhaskararao(eds.) *Studies in Possessive Expressions*. Tokyo University of Foreign Studies. 143 - 160.
- Spencer, A. 1991. *Morphological Theory: An Introduction to Word Structure in Generative Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . A. 1995. Incorporation in Chukchi. *Language* 71. 439 - 489.
- 田村すず子. 1973. 「アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造」. 『アジア・アフリカ文法研究』2. 東京: 東京外国語大学. 73 - 94.
- . 1988. 「アイヌ語」. 亀井孝他(編). 『言語学大辞典』1. 東京: 三省堂. 6 - 94.
- . 1996. 『アイヌ語沙流方言辞典』. 東京: 草風館.

The Structure and Function of the So-called “Verbs of the Third Class” in the Chitose Dialect of Ainu

TOMOMI Sato

Summary :

It is known that Ainu has a special class of verbal forms called “Verbs of the Third Class.” Such verbal forms are characterized as consisting of an object noun (in most cases, position nouns and body part nouns) and a verb, having an idiomatic, unpredictable meaning, and exhibiting a certain kind of alternation between a word and a phrase according to a number of conditions: In the case of inflection (person marking) they usually appear as a sort of phrase-like form, while in the case of derivation they clearly appear as one word. Hence, a question arises: Why do these verbal forms need to have two different forms according to inflection and derivation? The answer will be as follows: since Ainu has a special restriction on noun incorporation in which a possessed form of a noun (and probably a person-marked form of a noun) cannot be incorporated into a verb as an object, the noun must be placed outside of the verb. On the other hand, an object noun is incorporated when the possessor of the noun is marked with a derivational affix, such as *yay-* ‘oneself’, *i-* ‘something’, *u-* ‘each other’, and the like. This difference in the behavior of object nouns with regard to incorporation can be explained, at least in part, by the difference of specificity or identifiability of the nouns involved: If the noun is high in its identifiability (i. e. possessed or person-marked), it must not be incorporated, while if the noun is hard to identify (i. e. not belonging to a particular object or person), it is expressed in the form of incorporation.

However, further study should be done in order to explain a number of problems, e. g. a problem of why a person marked noun can be incorporated into an intransitive verb as a subject in spite of its high identifiability. Therefore, it is most likely that other syntactic or semantic factors, such as the recoverability of the possessor depending on the valency of the verb, are involved here as well.

Key words : Ainu, distinction between a word and a phrase, phrasal verb, restriction on noun incorporation, identifiability, valency